

第2節 山岳信仰遺跡調査の課題

坂詰 秀一

1 山岳信仰遺跡研究の回顧

日本における「山」の考古学的調査・研究は、古来、信仰との関わりで展開してきた。その対象は、信仰の痕跡としての遺跡（遺構）であり遺物の存在であった。これら形而下の資料は、信仰の実態を具象的に顕在化させることができるのであるため考古学的研究の課題として注視されてきた。

現在、山岳信仰の考古学は日本の考古学において発展が著しい分野として関連分野からも注目されている。そこで当該分野の進展を、当面する課題に沿って逐次的に概観することにしたい。ここで当面する課題とは、所謂「歴史時代」の山岳信仰遺跡とそこから派生する事項及び展開についてである。考古学的方法による山岳信仰の調査・研究を逐年的に整理するとⅢ期にわけて展望することが出来る（1）。

第Ⅰ期（搖籃期）

山岳信仰に関わる遺跡・遺物の存在が認識され、表面採集による遺物の確認が進んで当該分野の先駆的報告・論文が発表された時期。

丸山瓦全・古谷清（1924）による日光男体山、鳥居龍蔵（1926）による筑波山、樋口清之（1927,28）による三輪山、大場磐雄（1935,36）による大山・日光男体山（二荒山）・箱根山・伊豆山・赤城山・榛名山などの調査結果が報告された。また、大場（1943）の総括的見解が集成された。大場は、石器時代～歴史時代の遺跡・遺物を資料として「神道考古学」（2）を提唱し、山岳信仰と修驗道との関係について論及し、以後における研究の方向性を具体的に論じた。さらに、大場は「祭祀遺跡ノ研究」（1947、國學院大學提出学位論文。1970公表）において「自然物〈山嶽・巖石・湖沼・池泉など〉」を対象とする祭祀遺構を分析し“神奈備式靈山”的存在を指摘すると共に祭祀遺物の諸相について具体的な資料を挙げて論じた。他方、山岳信仰は、山林仏教（經塚）、修法関係遺跡さらには峠の神に対する祭祀の痕跡なども加えて考察すべきことを論じた。かかる問題の提起は、石・水の信仰ともども「神道に関する諸現象を考古学上より考察し」て、「日本考古学の中に、神道を中心とする一分科を樹立」する構想のもとに体系的に主唱したものであったが、山岳信仰の考古学的研究の方向性を示したものであった。

第Ⅱ期（確立期）

考古学の視点で各地の山岳信仰についての関心が高まり、山岳山頂遺跡の発掘調査が試みられ、他方、山岳信仰に対する諸分野の研究成果が総括された時期。1959年に日光、1960年に大山・宝満山、1964～65年に戸隠、1975～77年に求菩提山などにおいて計画的な発掘が実施された。

日光男体山の山頂（2,484m）から仏法具の出土が知られていたが1959年に組織的な調査が行われた。山頂の遺跡は、男体山頂をはじめ太郎山頂、女峰山頂、大真名子山頂、小真名子頂にわたって認められたが、なかでも男体山頂から鉄錫杖・密教法具（独鈷杵・三鈷杵・羯磨など）・鏡鑑・鉄火打鎌・武具・農工具・懸仏・土器類・銅印などの多種多様の優品が検出された。古代から近世にわたるこれらの遺物は巨岩の岩裂を中心として見出され、儀礼のあり方を彷彿とさせる。

大山（神奈川）の山頂（1,252m）に存在する遺跡が1960年に発掘された。修法跡などが発掘され、1879年に出土した經塚関係の遺物のほか、小仏像（懸仏か）・土器類・錢貨などの出土が知られ、12～15世紀頃に比定される。

宝満山の山頂（830m）とその付近の調査が実施され、上宮岩壁の中腹の棚状部分及びその直下から銅鐘・錢貨・石製祭具・土器類が見出され古代の信仰の実態が明らかにされた。

戸隠山（1,911m）の奥社の講堂跡・院房跡と修行窟などの調査が行われ、前者から仏具・土器類、後者から金銅仏・仏具類が検出された。出土遺物の観察から13～14世紀の信仰の痕跡が顕現された。

求菩提山（782m）は修驗の道場として知られているが、3年間にわたる発掘によって多くの經塚が検出された。山頂の巨岩付近と岩窟内より見出された經塚は12世紀代のものであり、營造の実態が明らかにされた。

考古学的発掘が実施されたこれらの諸山は、古来、信仰の対象として遺物の出土も知られていたが、発掘の結果、

その事相の一端が明瞭にされたのである。このような山岳信仰遺跡の発掘の実施に呼応するかのように、山岳信仰に関する文献史学・宗教学・民俗学など諸分野の成果を集成した「山岳宗教史研究叢書」全18巻が刊行された。1974～84年にかけて刊行された主要靈山編(1～6)地方靈山編(7～13)文化・伝承・史料編(14～18)には、山岳信仰をめぐる研究の到達点が示されている。とくに、地方の諸靈山を修驗道の視点において展望すると共に修驗道の美術・芸能・文学・伝承文化を開示した諸編と修驗道史料が収録され、修驗道研究の指針的役割を果たすものであった。また、1985年に奈良国立博物館で開催された春季特別展「山岳信仰の遺宝」は、1983年から着手された大峯山寺の本堂解体修理に際しての発掘品・小黄金仏2躯なども展観され、まさに「時宜相応の企て」として注目された。それは「山岳信仰に焦点をあてた最初の企画」であり、山岳信仰の実相を遺物を通して総覽したものであった。山頂遺跡の考古学的発掘の兆し、山岳信仰研究諸分野の論文集成、山岳信仰遺品の展望は、山岳信仰の実態を考古学的方法で究明する方向性が確立されたことを示したのである。

第Ⅲ期(形成期)

山岳信仰遺跡の新たな研究視角は、1983年に着手された大峯山本堂の解体修理に伴う発掘調査が一の契機となって進展していく。1986年に國學院大學考古学資料館によって行われた白山(2,702m)山頂遺跡の発掘調査が改めて注目の的となり、1991,92年に実施された「大峰奥駆道の考古学的調査」を課題とする「山岳信仰遺跡の踏査とその測量を中心とした大峰山岳信仰遺跡の調査研究の方法とともに、山岳信仰遺跡の考古学による調査の方法が具体的に提示され、分布調査と発掘調査の必要性が求められるようになった。

大峰山の調査は「奈良山岳遺跡研究会」(研究代表:森下恵介)が組織され、大峰奥駆道の分布調査、參籠窟(笙ノ窟)の測量・発掘調査、深仙宿跡の測量調査、小篠宿跡の測量調査(1999～2001)が実施された。調査の成果は『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』(2003)として発表され、大峰山の開山が奈良時代後半であることが示されたのである。ついで、2003年には「吉野山金峰山信仰の考古学的研究」(研究代表:茂木雅博)として、吉野山南部遺跡群(安禪寺跡とその周辺の測量)の調査が、2005年には吉野山南部遺跡群「金照坊」地区・上岩倉遺跡の測量と周辺の悉皆調査が「山岳信仰の考古学的研究」(研究代表:橋本裕行)の一環として実施された。因みにこれらの研究は(財)由良大和古代文化研究協会及び(独)日本学術振興会の科学的研究費(基盤研究B)に関わる研究調査であった。

大峰山寺における発掘調査が触発となって「山の考古学研究会」が1987年に発足した。山岳信仰の考古学的調査研究が関連分野の研究ともども全国的に行われるようになっていったが、その間、山の考古学研究会は、逐年、調査成果の発表と情報交換の研究会を企画し、奈良(大峰山)栃木(日光山)滋賀(比叡山)神奈川(大山)富山(立山・剣岳)山梨(金峰山)石川(白山)奈良(大峰山・笙ノ窟)山形(出羽三山)奈良(吉野山)茨城(筑波山)大阪(高尾山頂遺跡)福島(飯豊山)鳥取(大山)和歌山(高野山)群馬(赤城山)福岡(宝満山)長野(戸隠山)滋賀(伊吹山)島根(大船山)山形(出羽三山)奈良(深仙窟・玉置山)山梨(乾徳山)などで研究集会をもった。このような動向は、各地域に山岳信仰遺跡についての関心を醸成する契機となり、刺激となって同好の士が増えといった。

2003～05年に福井で開催されたシンポジウム「山の信仰を考える」(朝日町)及び「山と地域文化を考える」(第20回国民文化祭越前町実行委員会)は圧巻であった。2003シンポで越前5山の越知山と山頂遺跡(大谷寺遺跡)に着目し、2005プレシンポで山岳信仰の考古学、本シンポでは「北部九州・近畿・関東・北陸と中国及び朝鮮」の諸靈山の基調報告があり、山岳信仰遺跡の調査の現況が示された。とくに3回のシンポジウムの資料集には、「全国の主要な靈山」「福井県内の主要な山と主な宗教施設」「山岳寺院データベース」などが収録された。2009年には「中世北陸の山岳信仰」(北陸中世考古学研究会)が開催され、越前、加賀、能登・越中、越中・加賀、越中にそれぞれ存在する諸靈山についての報告があり、考古資料による研究の状況が総括された。

山岳信仰遺跡のなかで、古来、調査の眼が向けられていたのは仏教及び修驗道に関する寺(「山寺」)についての関心であった。広義の信仰遺跡に対する調査が進展するのに伴い山寺についても注目されたのは当然であった。

2004～06年にかけて実施された「忘れられた靈場をさぐる」講演・報告会(栗東埋蔵文化財センター講座)

は、栗東と近江南部に残る「山寺」をテーマに開催され、報告集には紙上報告・調査資料集が収められた。また、2010年には「三遠の山寺」(三河山寺研究ミニシンポ、三河考古学談話会)が開催され、三河、遠江、駿河における古代末～中世の山寺についての知見がまとめられたことは有用であった。

「山寺」をめぐる総括的研究は、2008～11年の4年間、全国的に実施された「日本中世における「山の寺」(山岳宗教都市)の基礎的研究」((財)日本学術振興会・科学研究費(基盤研究B)、研究代表：仁木宏)が注目される。その総括シンポジウム「中世「山の寺」研究の最前線」が2011年に開催され、各地の「山の寺」調査の現状が報告された。この研究は、文献史学分野の研究者が「山の寺」を山岳宗教都市のあり方と関連して位置づける方向性をもつやに窺われるものであるが、その基礎資料は考古資料を一の前提とする。したがって、古代末～中世にかけての山寺跡の悉皆調査の実施が将来に向けて求められるにいたった。

山の考古学研究会の『山岳信仰と考古学』(2003)『山岳信仰と考古学Ⅱ』(2010)に収められた30余編の論文は、山岳信仰遺跡研究の基礎となり、調査の方向性の指針をも含むものであった。かかる動きは、各地において山岳信仰遺跡を考古学の方法によって明らかにする方向を惹起し、山の遺跡の分布調査、伝承廃寺跡の再検討が行われるようになった。加えて、従来、さして調査の対象として意識されることなく等閑視されてきた山の遺跡の発掘が試みられるような気運が地域ごとに横溢するにいたったのである(3)。

それに伴って地域史の研究目標に山がクローズアップされ、山の信仰に対する伝承などが文献史学分野の調査とあいまって展開していくようになっていった。それは地域における信仰の史的背景を闡明にする役割を果たすこととなり、考古学の有用が改めて注目されたのである。

以上、山岳信仰遺跡の研究を考古学の視野から搖籃・確立・形成とⅢ期に区分して展望してきた。素より粗略な独善的な区分であり管見に過ぎない。

2 山岳信仰遺跡の諸相

「山」の山岳信仰は、「山容」と関連づけて研究が進められてきた。それは、富士山を代表とする浅間型と三輪山を典型とする神奈備型である。この二者は、峻険的な前者、秀麗的な後者であり、集落(里)と遠隔の浅間型、指呼至近の神奈備型である。換言すれば、登拝修行の「山」は浅間型、仰ぎ尊び祈念する「山」は神奈備型である。神奈備型は、耕地と平面的に連続し人知の及ばぬ「山」としての存在である。山岳(山嶽)の信仰遺跡(4)と言えば、主として浅間型の「山」と感覚的に捉えられるが、神奈備型をも包括する場合もある。浅間型の遥拝祭祀遺跡、神奈備型の山裾祭祀遺跡をも対象として、それぞれの信仰遺跡として理解する方向も認められている。ここで対象とするのは、すでに研究の回顧において展望したように浅間型の「山」の信仰遺跡である。山岳信仰に関する遺跡は、大別すると遥拝の遺跡と登拝の遺跡となるが、一般的には、山(山岳)に存在する遺跡を連想する。山は、古来、生産の場であり信仰の空間であった。山における生産の様態は多岐にわたるが、その多くは信仰意識と暗に密接な関係を保持してきたことが知られている。山岳における信仰の場は、山頂、山腹、山裾と自然的環境によって分けられ、一方、山中に存在する洞窟・岩石・池などの自然物、祠・伽藍・埋経地(経塚)・宿坊などの人工施設による対象として認識される。これらの場は、自然条件の相異と信仰者の時代差によって一様ではないが、総じて認められている。

山岳信仰遺跡として広く意識されるのは、山頂に存在する遺跡(遺物存在地)である。周知の羽黒山(山形)信夫山(福島)筑波山(茨城)日光男体山(栃木)武甲山(埼玉)大山(神奈川)箱根駒ヶ岳(神奈川)富士山(山梨・静岡)金峰山(山梨・長野)妙高山(新潟)白山(石川・岐阜・福井)大峰山(奈良)宝満山(福岡)は、古代～近世の代表的な山頂信仰遺跡である。なかでも発掘調査が行われ日光男体山では太郎山神社の祠付近の岩の隙間などから鑑鏡(160面以上)、仏像、懸仏、鉄鐸(130)、鉄刀子(450以上)、鉄火打鎌(44以上)、銅印、錢貨(1300以上)、武器・武具類、馬具、農工具、仏法具(独鈷杵、三鈷杵、羯磨、鏡、高炉、花瓶、鰐口ほか)、経筒、禪頂札、種子札、陶磁器など多種多様な遺物が検出された。古代～近世に及ぶこれらの遺物は、男体山上において修驗道の信仰事相が行われていたことを示している。また、白山においては、鑑鏡、懸仏、仏法具(独鈷杵など)、火打鎌、経筒、陶磁器など、古代～中世の遺物が検出されている。さらに、大峯山上の大峰山寺本堂の解体修理

に伴う発掘によって、黄金仏、鏡像、御正体、鑑鏡、仏法具、銅板経、錢貨、陶磁器（青・白磁）などが出土し、10～12世紀における事相が知られた。大峰山頂には、湧出岩付近に营造された経塚、大岩の至近地に設定された護摩壇施設が検出されている。一方、宝満山の山頂遺跡は、山頂の岩壁の下方から、銅儀鏡、錢貨（和同開珎、万年通宝、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝、承和昌宝）、陶磁器（二彩、三彩、緑釉、灰釉）類、石製模造品など8～9世紀代の遺物が見出されている。

山頂遺跡の発掘が行われた2～3の例を見ると、修験的事相と非修験的事相の信仰様態を窺うことが可能である。ただ、かかる修験の行法には仏教的な事相の痕跡を内包混在していると考えられ、一方のしからざる例と対照的である。例えば仏教的な事相は、四度加行（十八道法・金剛界法・胎藏界法・護摩法）行法の痕跡とも考えられ、その場として頂上の空間が求められていたことは明らかである。また、儀鏡、石製模造品、錢貨を中心とする他例は、非創唱宗教の祈りの一類として理解すべき可能性を示しているとすべきであろう。

山頂には、経塚の营造が認められている。寛弘4(1007)年に藤原道長が奉納した金銅経筒を主体とする大峰の金峰山経塚はその代表的な遺例として知られている。計画的に発掘調査された朝熊山経塚（三重）求菩提山（福岡）楨尾山経塚（大阪）武藏寺経塚（福岡）は、山頂～山腹に营造された代表的な例である。経塚は、經典埋納の遺跡で北海道を除き全国的に認められているが、その多くは経筒と施設を伴う平安時代のものであり、中世末～近世にかけての礫石経とは性格を異にする。書写經典を埋納する目的のもとに形成された古代と中～近世の経塚が共に山頂とその近くに見られることは、山に認められる遺跡として注意される。

多く山腹に平場を造成し营造されている山寺（山岳寺院・山林寺院）は、以前から考古学の対象として注目されてきた。その多くは法燈の跡絶えた廃寺跡であり、堂宇が存続している例は、建築史・美術史分野の主対象として調査研究がなされてきた。考古学で対象としてきた山の廃寺跡については、かつて「山地区伽藍」と「山地任意伽藍」に2大別し、平地に营造された「平地方形区画伽藍」と「平地任意伽藍」と対比したことがある（5）。山地の2者は坐禅修行、平地の2者は都邑修学を目的とした造営と考えたのである。また、小さな山寺の多くは阿蘭若処として設営されたものであろう。その選地は闕伽水が絶えることのない場、あるいは巨岩・奇岩の存在する場、石窟であった。したがって、限られた時間の法灯の場であったと推察され、小規模かつ短期間内の施設として阿蘭若処の存在が推考される。それは小さな「山寺」であり、「山地区画」と「山地任意」に加えて「阿蘭若処」（6）的な性格を有する遺例が認められると推定される。

石窟は、他方、修験道の修行窟としても利用されたことが知られている。阿蘭若処であるか、修行窟であるか、石窟内における検出物の検討が必要であることは言うまでもない。

池中納鏡遺跡は修験道、池中經典投入遺跡は仏教的作善業の痕跡として把握される。前者は、羽黒山（山形）鏡ヶ池（600面以上）、赤城山（群馬）小沼（13面）、後者は、榛名山（群馬）榛名湖、などの諸例が知られている。

山頂、山腹、山裾に岩場・巨石の存在が認められる場合はそれ自体が信仰の対象とされている。山頂における岩場、山頂・山腹に見られる磐座としての巨石である。箱根駒ヶ岳（神奈川）の山頂には3箇の磐座があり、周辺より土師器坏が錢貨（宋錢片）とともに出土している。また、赤城山（群馬）の尾根上の「権石」は至近の4巨石と共に磐座群として知られ、周辺より石製模造品・手捏小型土器・玉などが採集されている。山頂近くと山腹の岩場には修験の行場が設定されていることもあるが、多く地名・伝承の場であり、考古学的資料を、見出すことはほととんど困難である。

山中には、修験の結界と考えられる巨石の存在が認められるが、結界標識となる整形痕、文字表現が認められるものはほとんどない。また、釘類の遺存による祠施設の存在を推察することはできるが、その確認には発掘調査が必要であることは言うまでもない。

仏教・修験における仏像は多種多様であるが、修験にとって不動明王・蔵王権現、役行者の崇拜対象は特有である。修法の対象である阿弥陀・薬師・虚空蔵・普賢・文殊・觀音などの造形、山伏の諸道具（十二、十六）類にも配慮される。それは諸山において見出される多くの仏法具ともども遺跡の特性を考える重要な遺品となっている。

3 富士山信仰遺跡調査の意義

富士山は、浅間型山岳信仰の代表的靈山として有名であり、古来、信仰史をめぐる研究歴は、まさに汗牛充棟の感がある。しかし、その考古学的事相は隔靴搔痒であり不鮮明である。1930年に山頂の三島ヶ嶽(3,734m)の北東部(3,713m)から発見された経塚は、一切経の埋納経塚として唯一孤高な作善堂の仏教遺跡であるが、不時発見のため、その全容は必ずしも明瞭ではない。三島ヶ嶽で発見された経塚(7)は久安5年(1149)に富士上人末代により一切経5,296巻などが、見仏悟道、仏法興隆を願い、鳥羽法皇ほか京洛、東海・東山両道の結縁者を得て駿河国富士山の山頂に营造したとされている。蓋し、未曾有の遺跡であり、仏教考古学とくに経塚研究者にとって不可避の経塚であった。この経塚の実態解明を意図した三宅敏之は1959年以来、関係史・資料を涉獵した。また、勝又直人(8)は、2008年に富士山世界文化遺産推進事業に伴い現地調査と現存資料の確認調査を行い、現在的所見を総括した。富士山には(9)、三島ヶ嶽経塚のほか、吉田口五合目経ヶ嶽(日蓮聖人宝塔の根元から「自然ニ地中ヨリ発掘」)より出土したと伝えられている室町時代の版経(法華経・序品)の残片が東京国立博物館に所蔵されている。また、1924年に日蓮聖人関係堂宇の増築工事中に出土したと伝えられる青銅鑄製の経筒(現存高さ約21.3cm、直径約13.5cm、厚さ1~2mm)納入の紙本経(朱書の観普賢経などで10巻、縦22cm、17字詰、46行)とともに2002年8月に富士吉田市歴史民俗博物館の企画展「富士の信仰遺跡」で展観紹介された。経ヶ嶽には、伝資料の出土地点を肯定すれば、平安時代後期及び室町時代に経塚の营造がなされたことが知られる。伝経ヶ嶽の平安時代写経は、朱書であり三島ヶ嶽経塚50巻中、3巻の墨書き外は朱書きであったことが想起される。

富士山における埋経は、平安時代後期に山頂(三島ヶ嶽)において末代上人によって行われたほか、末代上人又は有縁の勧進者により吉田口五合目(経ヶ嶽)においてなされたことも考えられる。山頂のほか木山と焼山の境における経塚の营造は、营造選地として首肯されるであろう。しかし、山頂の三島ヶ嶽経塚、吉田口五合目の伝経ヶ嶽経塚は、不時発見及び伝承資料であることに問題点が残されている。今後、「天地境」一森林限界ライン付近の計画的調査によってかかる問題解決の緒が見出せる可能性があろう。

富士山頂に大日寺と号する仏閣が末代上人により建立されたのは久安5年頃のことであった(『本朝世紀』第三十五)。この大日寺については位置など不詳であるが、三島ヶ嶽経塚より「承久」墨書き銘の経筒が出土しており承久年間(1219~1222)の埋経次第は大日寺との関係が考えられ、その位置は、後世「表大日」と通称された大日堂の近くであろうか。山頂は、経年自然環境の変容に加え、廢仏毀釈により仏教的施設などの解体除去、関係文物の破壊と遺棄が行われており、古代に限らず中世~近世における遺跡も同様である。かかる状況に対応するには、考古学的調査の実施が期待される。

中世の修験者及び道者の登拝の実際は、村山口の中心であった富士山興法寺〔村山浅間神社〕(駿河)と村山三坊(大鏡坊・池西坊・辻之坊)の故地調査、大日堂(興法寺)に保管されている下山仏の調査の必要がある。吉田口二合目の御室浅間神社には、かつて、文治五年(1189)七月二十八日銘の木造不動明王(?)像、建久三年(1192)四月九日銘の木造女神像が祀られ、他方、伊豆の走湯山との関係も推察されて浅間信仰及び富士山修験の拠点的位置を占めていた。吉田口二合目については、すでに発掘調査が試みられ注目してきた。

近世については富士講関係の石造物が吉田口の登拝道(道者道)各拠点に存在している。吉田口一合目の発掘は、登拝道の考古学的調査として先駆的な試みであり、関係諸分野から注目された。近世は、富士講による富士信仰が隆盛をきわめ、中世における道者の道を用いた登拝道のほか、八海巡り、角行終焉の人穴への道程、さらに碑塔の建立が認められているが、まだ不明のこと多く残されている。近世における富士信仰の実相は、甲斐・駿河の浅間神社の展開ともどもより将来の究明が求められている。

以上、富士山の「歴史時代」信仰遺跡について瞥見してきたが、それにつけても考古学的方法による調査と研究が等閑視されることであった。勿論、若干の先駆的な研究が認められるにしても、発掘調査の事例はまさに稀有であった。

2009年から2011年にかけて山梨県埋蔵文化財センターが実施した「山梨県内山岳信仰遺跡詳細分布調査」は、

2004年～2008年の「山梨県内中世寺院分布調査」の成果に立脚し、とくに山梨県南東部地域の「富士山信仰に関する遺跡」が対象とされた。この度の調査の特性としてとくに注目されるのは、(1) 浅間神社の境内地及び周辺の関連地、(2) 伝承地、(3) 富士山五～六合目の石室などの試掘確認調査である。

御室浅間神社本宮・里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社に対する考古学的調査は、はじめてのことであった。御室浅間神社本宮の周辺においては吉田口登拝道二合目の往時の環境を示唆する資料が検出され、また、五合目～六合目の石室の実態把握に関する手掛かりが得られた。御室浅間神社里宮、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社における境内地の試掘は、それぞれ浅間信仰の歴史的事相を考察する資料が得られたことは大きな成果であった。さらに、富士山遙拝の地と伝えられてきた大塚丘は、地中レーダー探査により人工と推察されたことも注目すべき成果であった。また、大善寺行者堂跡の伝承地、蓮華寺奥の院の伝承地にも、はじめて考古学的調査が試みられ、相応の結果が得られたのである。

富士の信仰を考古学的方法で調査する動きは、駿河側では、例えば富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社・大日堂などにおいて試みられてきた。甲斐側の吉田口登拝道の発掘、二合目の御室浅間神社とその周辺地の発掘、そして石室(五合目～六合目)の確認調査は、赤色立体図を有効に活用した悉皆調査に立脚して実施されたものであり、富士山の考古学的調査の必要性を具体的に示すことになったのである(10)。

註

- (1) 日本における山岳信仰の研究は、宗教史・文献史学・民俗学・国文学など多くの分野にわたって積み上げられて膨大であるが、考古学の分野においては、大場磐雄による神道考古学の業歴が知られている。以下、ここで触れるのは「歴史時代」の考古学分野の展望の一つとして、私なりの回顧に過ぎない。
- (2) 大場磐雄『祭祀遺跡 - 神道考古学の基礎的研究 -』(1970)『神道考古学論叢』(1943)は、その総括的な著作であり大場編『神道考古学講座』6巻(1972～81)には、大場の主張が収められている。
- (3) 東北・関東・中四国・九州などにおける活発な研究は、各地で山の考古学のシンポジウムが開催されていることによって知ることができるが、逐一については省略した。
- (4) 以下、山岳信仰遺跡について概略的に述べる。時代性については、あえて捉われることなく概観することにしたい。
- (5) 坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」(『立正大学文学部論叢』63.1979)
- (6) 坂詰秀一「阿蘭若処を伴う伽藍」(『日本佛教史学』14.1979)
- (7) 三島ヶ嶽経塚について真正面から取り組んだのは三宅敏之である。三宅は、1959年3月の歴史考古学研究会の例会で発表して以来、「富士山における一切經の埋納供養について」(『歴史考古』4.1961)、「富士曼荼羅と仏典埋納」(山岳宗教史研究叢書14『修驗道の美術・芸能・文学』I.1980)において総括した。
- (8) 勝又直人「三島ヶ嶽経塚小考—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—」(静岡県埋蔵文化財研究所『研究紀要』17.2011)
- (9) 富士山の経塚については篠原武の研究が本書に収められている。研究の現状と問題点については篠原論文を参照。以下は、私見の現在的略述である。
- (10) 本書所収の野代恵子の報告を参照。